みのむかし話

その3

津島神社のむかし話

津島さん

文禄二年(一五九三年)の六月から八月ごろ、この浦に女の人の謡うとても美しい声が海の中から聞こえてきました。里人が行ってみても誰もおりません。巫女に託したところ「私は海中に住んでいる津島神なり。今からこの島に住み里の小児や牛馬を病から護るから、木をたくさん植えて私をお祀りなさい」とご神託が告げられました。里人は、鳥居を作り島の神としたところ、久保谷では疫病もなく牛馬も死なくなりました。他の部落で流行病で牛馬が死んでも、久保谷では死なない。それから百姓たちは、小児や牛馬の神として、旧の六月二十四・二十五日には津島神社へお参りの後、潮水で牛馬の体を洗って帰りました。

潮あびをすませた牛には、島に生えているうばめがしを、必ず食べさせたということです。赤い幟と一緒に、潮水も樽に汲んで持って帰り、家族中で風呂を沸かして入りました。

サバライの日は朝からとてもにぎわっていました。

(最近では、牛馬の神としてよりも、子どもの守護神としての信仰が厚く、愛児が生まれると参拝して氏子とすることが多い。夏の祭典には、多くの露店が境内の松林に並び、花火大会があり大変にぎわう。当日は、参拝者のため国鉄の「津島ノ宮駅」が臨時に設けられ、臨時列車も運行される。昔は、舟で来る者もあり、年間の参拝者の数は約六万といわれている。当社は、景勝に富み、古く浮世絵師二代目歌川(安藤)広重に描かれ大見八景の一であると共に、昭和二八年には、讃岐百景の一に指定された)

※旧暦の六月二十四・二十五日の祭を「サバライ」といい、牛馬も津島さんへお参りして潮をあびていた。そして、赤い小幟を頂くという風習が長く続いていた。

参考文献三野町誌(昭和五五年発刊七七〇P)